

はじめに

「様々な人々と関わりながら学び、自分の存在が認められ、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできるなどの実感をもつことができる場。未来の社会に向けた準備段階の場。未来の創造を目指す場所である。」と平成27年「論点整理」では、改めて学校の意義が明確に打ち出されました。

「特別の教科 道徳」の完全実施を平成30、31年度に控え、大仁中学校区の研究は、改正学習指導要領具現化のための模索からスタートしました。いじめや自殺等の問題が山積する現代社会にあって、道徳教育の抜本的改善・充実により、学校が、心と体の調和の取れた人間育成の場でありたい。そのための指導方法をどう改善するか。本研究は、公務ご多用中の文部科学省赤堀博行教科調査官様のご指導を仰ぎながら、道徳教育研修を深めて参りました。

赤堀調査官のご助言は、

「道徳を指導する教師が、自ら明確な指導観を確立しているか。」の問いでした。

「考え、議論する道徳の授業は、授業の形や型の改善を目指すものではない。」

「自分たちは、どんな道徳授業を創造したいのか。」

それは、まさしく根源的な問いであり、突きつけられた課題は「視座の転換」でした。

目の前の児童生徒の実態分析、重点内容項目、中学校卒業時をイメージした目指す生徒像等について、小中授業研究、活動、連携の合同3部会を通して、3校の教師が顔を合わせて意見を語り、対話を繰り返して向かうべき方向を確かめる「大仁方式」で研究を進めてきました。

教師自らが児童生徒と共に考え、悩み、感動を共有しながら学ぶ時間を積み重ねました。道徳教育推進教師を中心に作成した職員室掲示全体計画や別葉はチェックの色で染まりました。日々の道徳教育の振り返りから、「児童生徒にどんなよさが見られ、今の課題は何か。」と進捗状況を確認し、より実効性のある指導計画への改善を進めました。まさに道徳教育は道徳授業を要とするカリキュラムマネジメントが重要であることを実感した2年間でした。組織で取り組むことで、児童生徒を、教師を、地域を変容させていった手応えを実感しました。

授業前よりも深い学びとするために、授業のねらい、価値、実態、教材を吟味し合う教職員の声が聞こえる職員室。「道徳の授業が楽しみになった。」という児童生徒の声を励みに「考え、議論する道徳は、考え、議論する教師集団から。」と研究の合い言葉が生まれました。

家庭や地域、教育活動全体から生まれた心の貯えが、児童生徒の道徳性を育む豊かな土壌を築いていきます。一人一人の児童生徒に「自信」と「誇り」を育てる道徳教育に携わる教師の夢と希望が、改正学習指導要領の具現化にあると確信しています。

私たちのささやかな研究実践が「特別の教科 道徳」へのアプローチの一助となれば幸いです。

平成28年11月2日

伊豆の国市立大仁中学校長 相馬美樹子